OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	平安（末期）写本の痕跡 ： 鎌倉写本の和歌書式からみえてくるもの
Author(s)	小林, 理正
Citation	語文. 2019, 112, p. 32-42
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/77202
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

平安（末期）写本の痕跡

――鎌倉写本の和歌書式からみえてくるもの――

小林理正

一　はじめに

『源氏物語』には七九五首もの作中歌がある。作中歌に注目して写本をみていくと、その書式にはいくつかのヴァリエーションがあるとわかる。書写者がそれぞれ異なるため、和歌書式に揺れがあるとするならば理解もしやすい。だが、たとえば定家自筆本と明融本を確認すると、和歌書式には幅があると知られ、同一書写者であっても書式に揺れがあるとわかる。[1] いま定家本と明融本にみえる書式について簡単に整理しておく。①A様式―第一・二行目の行頭を一～二字下げて記し、後続本文は改行して行頭から書く（三行に及ぶ例もある）。②B様式―第一行目のみ行頭を一～二字下げて記し、二行目以降は行頭から書く。後続本文は和歌に続ける。③C様式―第一・二行目は行頭を一～二字下げて記し、後続本文は和歌に続ける（三行に及ぶ例もある）。④D様式―第一行目のみ行頭を一～二字下げて記し、二行目は行頭より書く。後続本文は改行し、行頭からはじめる。[2]

A・B・Cの三様式は実例が多く、事改めて説明する必要もないだろう。ただしD様式は『源氏物語』諸本中伝定家筆本行幸巻や明融本、池田本や尾州家河内本などにみえるものの、その数は鎌倉写本群にあっても多くない。なお二首以上和歌が連続する場合、形式上D様式となる事例を確認しているが、これはB様式の変型例と思しく、純粋なD様式と認められるものではない。それゆえ問題とはならない。D様式についてはなお考える必要があるけれど、鎌倉期から近世期書写本に四書式は散見するから、これらを主だった和歌書式としてひとまず位置付けておく。

問題となるのは、たとえば天理図書館蔵伝西行筆本竹河巻と甲南女子大学蔵伝為家筆本梅枝巻にみえる以下に掲げる書式である。

①　伝西行筆本竹河巻・一六丁オ

かちにかきてはしに　たけかはのはし
うちいてしひとふしにふかき心のそこは

くみきやとかきたりしん殿にもてまい
りてこれかれみたまへてゝなとのいとおかし

②伝為家筆本梅枝巻・一一丁ウ～一二丁オ

頭中将にたまふとりてさい相の
中将にさす
うくひすのねくらの枝もなひ
くまてなをふきとをせよはの
ふえたけ
さい相
こゝろありてかせのよくめるはな　」（一一丁ウ）
のきはとりあえぬまてふきやよるへき
なさけなくやとてとみなわらひたま
ひて弁の少将

和歌には傍線を施した。①では地の文に和歌が埋没している（以下、埋没書式）。といっても和歌直上に二字程度の空白を置く点で視覚的に地の文との区別がつく。また②は別行書きながら、行頭を字下げしていない（以下、〈別行×行頭〉書式）。①は為家本『土左日記』にみえる書式であったから、平安期の和歌書式と捉えられてきたきらいがある。だが『土左日記』は必ず日付で改行するため、原則、和歌で改行する物語写本の有り様とは異なる態度で書写されたとみておく必要があるだろう。なお①は伝西行筆本のみにみえる事例ではなく、天理図書館蔵伝為相筆本末摘花巻にもみえる。しかし、伝西行筆本や伝為相筆本の事例をもって平安期における和歌書式を推定する場合、用例が僅かであるために「作者の不注意」[3]に因る書式なのか、あるいは親本表記に引きずられたものなのか判断できないという問題を孕んでいた。

ところが加藤昌嘉が親本書式に引きずられ、埋没書式で一度記した和歌をA様式に修正している事例を紹介した[4]。これにより現存写本の中には親本書式の面影を留めるものがある実態が浮かびあがった。肝腎なのは、ここでいう「親本」が如何なる本であるかという点である。加藤が紹介した国冬本は鎌倉写本であったし、また日本大学蔵『大斎院前の御集』も鎌倉写本であった。鎌倉写本は同時代写本を親本に用いる場合もあるが、平安写本を採用することもあるだろう。たとえば伝西行筆本は鎌倉前期写と目されており、充分に平安写本を参看しうる伝本といえる。とすると、鎌倉写本に残存する①は親本に想定されうる平安写本の和歌書式を伝えるものである可能性があるのではないか。

本稿は為家本『土左日記』から距離をとったうえで、用例の拡充を図りつつ、平安写本の和歌書式について具体的に想定するものである[5]。なお歌集（序を除く）や歌物語、日記は改行点が物語とは異なる場合も多く、本稿では扱わないこととする。また影印資料等の確認が容易な『源氏物語』諸本を調査対象とした。

二　現存平安写本の和歌書式

従来の検討はどういうわけか現存平安写本の書式について言及しない。平安期の和歌書式を考えるうえで、現存平安写本の確認

は不可欠である。『古今集』には幸い平安写本が伝わるから、当該本の仮名序の和歌書式について確認し、整理しようと思う。参看する平安写本は元永本／筋切／伝藤原行成筆切／伝源俊頼筆巻子本切である。[6] なお『詩経』六義を踏まえた箇所を対象とする。

① 元永本・七丁ウ～八丁オ

そへうたおほさゝきのみかとを
そへたてまつれる哥
なにはつにさくやこのは
な冬こもりいまはゝるへとさ
くやこのはな
と云るへし（なる）　ふたにはかそへ（つ）　」（七丁ウ）
うた
さくはなにおもひつくみのあち
きなさみにいたつきのいる
もしらすて
と云るなるへし

② 筋切・一五丁オ～一五丁ウ

かくそあるへきそのむくさのひと
つにはそへうたおほさゝきのみ
かとをそへたてまつれるうた
なにはつにさくやこのはなふゆこ
もりいまはゝるへとさくやこのはな
と云へるなるへし
ふたつにはかそへうた　」（一五丁オ）
さくはなにおもひつくみのあち
きなさみにいたつきのいるもしらすて
といへるなるへし

①②ともに〈別行×行頭〉書式となっている。いわゆる古注は元永本の場合いずれも〈別行×行頭〉書式となっている。筋切は「やくもたつ」歌（一二丁オ）を和歌直上に一字程度の空白を置き、埋没書式とするが、その他は〈別行×行頭〉書式で記す。ところが、挙例箇所を伝源俊頼筆巻子本切でみると、次のようになっており、平安写本の間でさえ和歌書式に揺れがあるとわかる。

○ 伝源俊頼筆巻子本切・『古筆学大成2』一四二～一四三頁

あるへきそのむくさ一にはそへ哥
おほさゝきの帝をそへたてまつれる
なにはつにさくやこのはな冬こもり　」（第八紙）
いまは春へとさくやこの花といへる
へし（なる）　二にはかそへ哥
さくはなにおもひつくみのあ
ちきなさみにいたつきのいるもし
らすて
といへるなるへし

和歌を別行としたうえで、行頭を一字下げて記している。伝藤原行成筆切は別行とし、行頭を二字下げる。なお同本古注にみえる「すまのあまの」歌は埋没書式となっている。肝要なのは平安

写本の『古今集』仮名序に古注を除いて埋没書式がみえないこと、その一方で〈別行×行頭〉書式がみえることである。少なくとも和歌書式が厳密に定められたものではなく、書写者に因るものであったということが平安写本の『古今集』仮名序から指摘できる。

次は平安末期写と目される国宝『源氏物語絵巻』の和歌書式を確認する。(7)

○ 国宝『源氏物語絵巻』鈴虫一・第三紙・八五頁

むしはこゝろやすくいまめきたる
こそらうたけれとのたまへは
おほかたの秋をはうしとしりにしを
ふりすてかたきすゝむしのこゑ
としのひやかにのたまふいとなまめ
きてあてにおほとかなりいかにと
かやいてやおもひのほかなる御こ
とそとて
こゝろもてくさのいほりを
いとへともなをすゝむし
の
こゑそたえせぬ

行頭を一～三字下げて別行書きとする書式が国宝『源氏物語絵巻』の基幹書式と思しい。そのほかに散らし書きや一行目を行頭より書き、二行目を二字程度下げるものがあると知られるが、埋没書式はない。続けて平安末期写とされる国宝『寝覚物語絵巻』を確認する。(8)

○ 国宝『寝覚物語絵巻』第三段・第一紙・一九頁

ゑにかきてもあまりにみゆるよろつをか
きつくしいひおきてかへりなんとするほと
ほとゝきすひとこゑうちなきてわたる
うき世にはわれすみわひぬほとゝきす
しての山ちにしるへやはせぬ
とていてたまふつきかけなけのまもゆゝしく

『寝覚物語絵巻』は和歌の行頭をいずれも一～二字下げて別行としている。埋没書式の例はない。絵巻の詞章は冊子本と異なる書写態度によって記された可能性をも考慮する必要があるが、掲げた二つの絵巻に埋没書式や〈別行×行頭〉書式がみえないという事実は重く受けとめる必要があるだろう。

三　鎌倉写本の和歌書式と削訂痕

具体的に埋没書式、ならびに〈別行×行頭〉書式を確認しようと思う。以下、東山御文庫蔵各筆源氏（以下、御物本）を主に取りあげる。当該本は鎌倉中期写とされる古写本で取合せ本となっている。以下に掲げるのは御物本桐壺巻における事例である。同巻は全九首の和歌を有しており、問題となるのは第八首目「いときなき」とはじまる歌である。

○ 御物本桐壺巻・四三丁ウ

ほうちきに御そひとくたり

れいのことなり御さかつきの
ついてに▼――――▼
いときなきはつ もとゆいになか
きよを
契心はむすひこめつや
と御心はゑありておとろかせ給

二つの「▼」間には「いときなきはつもと」とあったものを擦り消した痕跡がある。囲み表示を施した「いときなきはつ」とある部分にも削訂跡が認められる。擦り消された文字を読み解くと「ゆいになかきよを」とあると知られる。削訂された文字を繋げ読むと「いときなきはつもと／ゆいになかきよを」となり、当該部にみえる「いときなき」歌の上句に相当するとわかる。桐壺巻書写者は一度和歌の上句を本文に追い込む形で記していたのだ。

挙例の有り様は、書写者が当該表現を和歌と気付かず書写したために生じたものと思しい。たとえば「いときなき」とはじまる和歌を『源氏物語』以前より拾うと、『公任集』「いときなきあやめはおふる所がら誰にかかりてふべきちよぞは」（七〇）のみと少ない(9)。書写者が「いときなきはつもと」と記した時点で和歌と気付かない可能性は充分ありうる。埋没書式で記し始めた書写者は途中で書写本文が和歌と気付いた。それを別行書きで記す態度に従い、上句を擦り消し、別行にして字下げし書き直したのだろう。たとえば親本書式が別行書きで、かつ行頭を字下げして記してあったならば、視覚的に和歌とその他の本文との区別は可能であり、地の文中へ追い込む形式で書写するとは想定しづらい。御物本桐壺巻「いときなき」歌は書写者の書写姿勢に反して埋没書式で記されたと考える必要があろう。当該歌が一度地の文中へ追い込む形で書写されたのは、親本書式に引きずられたためとみるべきではあるまいか。

次例は和歌の一部を塗りつぶしたうえで、別行書きへ修正してあるケースである。

○ 御物本絵合巻・二一丁オ
さしのはしをいさゝかをりて
（し）めのうちはむかしにあらね心ち
して神よのこともいまそ恋しき
とてはなたのからのかみにつゝみて
まいらせ給御文（使）のやう（ろく）なと○（いと）な○（ま）め

「○」は補入記号を意味する。一行目末尾の「し」が塗りつぶされている。また丸括弧で表示した「し」は行頭余白部に記されている。塗りつぶされている「し」は「しめのうちは」歌の一字目であろう。それを別行書きに改めるため、前行末尾にある「し」を塗りつぶし、次行の行頭余白部へ新たに「し」と書き足したのではないか。親本の和歌書式が全て別行書きである場合、和歌とそれ以外を視覚的に区別することは容易く、「しめのうちは」歌のごとき事例が生じるとは考えにくい(10)。挙例は親本書式を継承したか、あるいは親本のレイアウトに引きずられる形で一度書写したが、書写者が和歌と気付いたために訂正した事例として見ておく

必要がある。なお絵合巻は九首の和歌を有する巻で「しめのうちは」歌（九首目）以外に「うきめみし」歌（一三丁表／四首目）が埋没書式となっている。「うきめみし」歌には修正した痕跡はみえないから、地の文中へ追い込む形で書写したさい、和歌と気づかなかったという想定は充分ありうるということを申し添えておく。

次の事例は絵合巻のケースに近いといえる。

○　御物本若菜上巻・六四丁ウ

なんむかしにかはりておとな〳〵しくはきこへ
給ものからこれをかくてやはとひきうこかし給
給　とし月をなかにへたて、たふさかの
さもせきかたくをつるなみたか女□□
　なみたのみせきとめかたきしみつにて
ゆきあふみちははやくたえにきなとかけ
はなれきこへ給へといにしへをおほしいつるも

挙例中の「□」は空白を意味する。「とし月を」歌の直上の「給」が塗りつぶされている。肝腎なのは二行目末尾にある「給」が「とし月を」歌と前行の行間に記されていることである。「とし月を」とはじまる歌がわずかであることに鑑みると、書写者は「とし月を」歌を和歌と認識していなかった可能性も考えられる[11]。和歌と気付かずに「給」に続けて書写したが、後に歌と気付き、行頭にあった「給」を塗りつぶし、前行へ追い込むことで和歌をB様式に改めたのだろう。若菜上巻全二四首中埋没書式となっているのは第一一首目の「とし月を」歌のみであり、その他はいずれも別行書きとなっている。当該歌の和歌書式が別行書きであったならば、字下げを施し、別行で記される蓋然性が極めて高いが、そのようにはなっていない。当該例もこれまで確認した例と同様、親本書式に引きずられた和歌書式とみてよいだろう。

ここまで御物本の事例を取りあげてきたが、修正痕の残る事例は何も当該本のみに留まるものではない。たとえば天理図書館蔵伝為氏筆本朝顔巻にも削訂痕のみえる例がある。

○　伝為氏筆本朝顔巻・三七丁ウ・四〇丁オ

ゐいたしたまはりけにこそさため
なきよなれとはかなきことにつけ
てもまゐおほしつゝけらる▼
▼人しれす神のゆるしをまちし
　まにこゝらやねなきよをすこすかな　」（三七丁ウ）
いまはなにのいさめにか○つけませ
たまはんとすらんなへてゐよにもわ
つらはしき事さへ侍りしのちさま〴〵

伝為氏筆本は錯簡が生じており、掲出箇所はその影響を受けているため丁数が乱れている。検討の都合上、丁数はそのままに錯簡を元に戻したうえで掲げた。挙例中「▼」で示した箇所を影印で確認すると、一つ目には「人し」を擦り消した痕跡があり、二つ目と直後の「人しれ」とある箇所には「れす■」（■は判読困難字を意味する）とあったものが削訂した跡が残っていると知られ

る。同巻作中歌は当該歌を除き、全てA様式で記されているから、別行で記す意識を書写者が有していたとわかる。仮に親本において当該歌が別行書きであった場合、埋没書式で和歌を書写するとは想定しづらい。とすると、当該例は地の文中へ書写者のケアレスミスのために追い込まれたのではなく、親本の和歌書式に引きずられたために生じた事例と捉える必要があるだろう。

なお、これまでのものとは異なるが天理図書館蔵池田本真木柱巻には次のような例がある。

○　池田本真木柱巻・四三丁ウ～四四丁オ

心くるしうなんいかてかきこゆへき
とおほしなやむもいとかたし
けなしとみたてまつる□□□　」（四三丁ウ）
▼―▼かはかりは風にもつてよ花のえに
たちならふへきにほひなくとも
さすかにかけはなれぬけはひを
あはれとおほしつゝかへりみかちに

真木柱巻は和歌を二一首有した巻である。挙例の「かはかりは」歌は第一四首目であり、丁をまたいで一行目からB様式で記されている。しかし影印資料をよく確認すると、二つの「▼」の間には「かはかり」の文字が擦り消されているようにみえる。初句が「かはかりは」とある歌は『源氏物語』以前にはなく、鎌倉期においても『いはでしのぶ』の「かばかりはむすびなたえそあやめ草おなじあさかのぬまの契を」と『玉葉集』の「かばかりはなにゆゑおつる涙ぞと我もあやしき物をこそ思へ」（恋歌三・一五四二・章義門院）を俟つ必要がある。「かはかりは」とはじまる歌がわずかなために、書写者が和歌と気付かず、誤って行頭から記した可能性もありうるだろう。もちろん丁変え後、親本書式に引きずられたため当該歌を行頭から記した可能性も捨てきれない。少なくとも池田本の挙例歌以外は別行書きで、行頭を字下げする書式となっているから、別行で和歌を記す意識が書写者にはあったといえる。と同時に、四三丁裏最終行は改行による三字程度の空白を有しているから、書写者は次に記す本文が和歌であると理解していた。にも関わらず、和歌を行頭から記してしまったのだ。となれば、書写者の不注意に因る〈別行×行頭〉書式ではなく、親本書式に引きずられたものとみるのが穏当であろう。

四　まとめ

ここまで鎌倉写本にみえる特異な和歌書式について縷々述べてきた。本稿で確認した御物本の桐壺・絵合・若菜上巻と伝為氏筆本朝顔巻の事例に透けてみえるのは、当該本の親本が埋没書式でもって和歌を記していた可能性である。掲げた実例は親本の和歌書式が地の文へ追い込まれていなければ生じにくいものであった。埋没書式は親本に想定される平安（末期）写本、あるいは同時代書写本―鎌倉初期写本の名残ということが一応できるだろう。

また池田本真木柱巻の事例は削訂痕をみるかぎり書写者に因る和歌書式ではなく、親本由来のものであるようにみえるとした。

しかし、同巻は定家本の流れに位置付けられる伝本であるから、親本に平安写本を想定することは難しいといわざるをえない。だが逆に、当該例からは〈別行×行頭〉書式が鎌倉期には未だ失われていなかった実態が透けてみえる。加藤昌嘉が「和歌の部分で改行したり字下げしたりしたのは、鎌倉時代の書写者（読者）だったのではないか」[12]と疑問を投げかけていたが、鎌倉期における書写態度としてみてよいように思う。

だが、なぜ現存平安写本に埋没書式がみえないのかという疑問については未詳というよりほかなく、また埋没書式で記された和歌が存在する要因についても詳らかにできなかった。料紙が貴重であったために地の文中へ和歌を追い込み、紙幅を節約したとする推察も可能だが、現存平安写本に埋没書式がみえない以上、主要な要因として想定することは難しい。

なお今回の調査で新たに確認した『源氏物語』鎌倉写本における埋没書式、〈別行×行頭〉書式の事例を本稿末尾の表一に一括し、示した。参照されたい。[13]

注

（1）たとえば田中新一「王朝物語本における和歌書式」（樋口芳麻呂編『王朝和歌と史的展開』笠間書院、平成九年）が他の鎌倉写本の和歌書式も合わせて示しており有益だが、細かな書式の揺れについては触れない。しかし加藤洋介が「大島本源氏物語の本文成立事情―若菜下巻の場合―」（中古文学会関西部会編『大島本源氏物語の再検討』和泉書院、平成二一年）において定家自筆本と明融本における和歌書式のヴァリエーションを指摘したことで同一書写者であっても書式に幅がある実態が浮き彫りにされたといえる。

（2）注（1）加藤論考に各様式のモデル図が示されている。参照されたい。

（3）『天理図書館善本叢書　源氏物語諸本集Ⅰ』（八木書店）解題（會澤太吉執筆）。

（4）加藤昌嘉「和歌の書記法」（同『源氏物語前後左右』笠間書院、平成二六年。初出は平成二三年）。

（5）和歌書式を論じた先行研究には田村悦子「散文（物語・草子類）中における和歌の書式について」（『美術研究』第三一七号、東京国立文化財研究所美術部、昭和五六年七月）、注（4）加藤論などがある。本稿は主に加藤論の後塵を拝しつつ、資料紹介を兼ね、改めて平安期における和歌書式を具体的に想定するものである。なお岡田貴憲「『和泉式部物語』諸本論の再検討」（同『和泉式部日記』を越えて』勉誠出版、平成二七年。初出は平成二二年）が数多くの埋没書式例を紹介しており、有益である。参照されたい。

（6）参看した『古今集』伝本は以下のとおりである。元永本―『元永本古今集〈上〉伝源俊頼筆』日本名筆選30（二玄社、平成六年）。筋切―田中親美編『古今和歌集』上（倉田實、大正一一年）。伝藤原行成筆切／伝源俊頼筆巻子本切―『古筆学大成』第一（～二）巻（講談社、平成元年）。

（7）五島美術館編『国宝源氏物語絵巻』（平成二二年）を用いた。

（8）大和文華館編『特別展　国宝寝覚物語絵巻―文芸と仏教信仰が織りなす美―』（平成二三年）を用いた。

（9）和歌の引用はすべて『新編国歌大観』（角川書店）に拠る。

（10）地の文が行末まで続き、次行より和歌を記すケースがある。字下げを施す書式であるならば、視覚的区別はつくといえるが、以下に掲げる伝為相筆本末摘花巻のごとき事例では和歌と地の文との区

別は容易ではない。

○　伝為相筆本末摘花巻・二九丁ウ

いとゝいそきいて給たのもしき人なき御ありさまをみそめたるひとにはうとからす思ひむつひたまはんこそほいある心ちすへけれゆるしなき御けしきなれはつらうなとことつけてあさひさすのきのたるひもとけながらなとてつらゝのむすほゝるらんとのたまへとたゝむゝとうちわらひていとくちをもけなるもいとをしけれはいて給ぬ

（11）　平安末期までの詠歌例を示すと、挙例を除くとき「年月をまつにひかれて経る人にけふぐひすの初音きかせよ」（初音巻）と西行の「年月をいかで我が身におくりけむ昨日見し人けふはなき世に」（『宮河歌合』・五七／『山家集』・七六八など）の他に『夜半の寝覚』「年月をへだててだにもあるものを今夜をさへやなげきあかさん」（巻四）がある程度であり、その用例数はわずかといえよう。書写者（享受者）が初句「とし月を」を和歌でないと誤解する可能性は充分ありうる。

（12）　注（4）に同じ。

（13）　先行研究が指摘している例は基本的に除いた。なお国冬本の事例は翻刻資料（『本文研究　考証・情報・資料』第一（～六）巻（和泉書院、平成八（～一六年）によって胡蝶巻までは紹介されているが言及されていないものも多く、未翻刻巻についてはその様相すら知られていない。それゆえ胡蝶巻以前の例も合わせて掲げた。

【附記Ⅰ】

本稿で参看した『源氏物語』の鎌倉期書写本は以下のとおりとなっている（順不同）。

①池田本（『新天理図書館善本叢書池田本1（～10）』八木書店、平成二八（～三〇）年）。②榊原本（『源氏物語　榊原本一（～五）』（勉誠出版、平成二四年）。③保坂本（『保坂本源氏物語第一（～一二）巻』おうふう、平成七（～九）年）。④御物本（『東山御文庫蔵源氏物語（各筆源氏）』貴重本刊行会、昭和六一年）。⑤定家本（『定家本源氏物語　行幸・早蕨』八木書店、平成三〇年）。⑥歴博本（『国立歴史民俗博物館蔵貴重典籍叢書』文学篇第十七（十八）巻〈物語二（三）〉臨川書店、平成一二（一四）年）。⑦橋本本（『国文学研究資料館蔵　橋本本『源氏物語』「若紫」』新典社、平成二八年）。⑧平瀬本（『平瀬本源氏物語』（京都帝國大學文學部、大正一〇年）桐壺・真木柱巻。⑨国冬本（天理図書館・紙焼き写真）。⑩飯島本『飯島本源氏物語1』（笠間書院、平成二〇年）空蟬巻。⑪陽明文庫本（『陽明叢書国書篇第一六集　源氏物語1（～16）』陽明文庫、昭和五四（～五七）年）。⑫蓬左文庫本（『源氏物語古本集』日本古典文学影印叢刊18、貴重本刊行会、昭和五八年）。⑬甲南女子大学本（『源氏物語鎌倉古写本梅枝　紅葉賀』勉誠出版、平成二二年）。⑭阿仏尼筆本（『阿仏尼本はゝき木　東洋大学附属図書館蔵』勉誠出版、平成二〇年）。⑮日本大学本（『日本大学蔵源氏物語鎌倉諸本集一（二）第一二（一三）巻』八木書店、平成七（～八）年）。⑯玉里文庫本（国文学研究資料館・紙焼き写真）。⑰静嘉堂文庫本（『静嘉堂文庫所蔵　物語文学書集成　源氏物語』第一三編、雄松堂フィルム出版、昭和五五年）。⑱尊経閣文庫本（前田育徳会尊経閣文庫編『源氏物語（青表紙本）』原装影印古典籍覆製叢刊、雄松堂書店、昭和五三年）。⑲冷泉家時雨亭文庫本（『源氏物語　柏木　河海抄巻第十五』冷泉家時雨亭叢書第九九巻、朝日新聞社、平成二七年）。⑳伏見天皇筆本（『古典文庫』平成三（～七）年）。㉑穂久邇文庫本（日本古典文学影印叢刊『源氏物語』貴重本刊行会、昭和五四（～五五）年）。㉒尾州家河内本（『尾州家河内本源氏物語第一（～一〇）巻』八木書店、平成二二（～二五）年）。㉓河野記念文化館本（『源氏物語　上（下）伝冷泉為相他筆鎌倉期古写本』愛媛大学古典叢刊23（24）、青葉図書、昭和五〇年）。

㉔ハーバード大学本（『ハーバード大学美術館蔵『源氏物語』「須磨」（「蜻蛉」）』新典社、平成二六年）。㉕天理図書館蔵本（『天理図書館善本叢書　源氏物語諸本集一（二）』八木書店、昭和四八（～五三）年）。なお天理図書館にてデジタル公開されてあるものは、それに拠る。㉖桃園文庫本（『源氏物語（宿木巻）・源氏物語系図』東海大学桃園文庫影印叢書第七巻、東海大学出版会、平成三年）。㉗國學院大学蔵本・花宴巻（請求記号：貴269）國學院大学図書館デジタルライブラリー。㉘学習院大学蔵本・藤袴・帚木巻（国文学研究資料館・紙焼き写真）。㉙角屋保存会蔵本・末摘花巻（加藤洋介「角屋保存会蔵源氏物語末摘花―解題と影印・翻刻―」（「角屋研究」第十八号、平成二一年二月））。㉚飯沼山圓福寺蔵本・幻巻（佐々木孝浩「飯沼山圓福寺蔵源氏物語「まほろし」帖―解題・影印・翻刻―」（「斯道文庫論集」第五三号、平成三一年二月））。

【附記Ⅱ】

歴博本若紫巻には、以下のモデル図のような書式がみえる。管見の及ぶかぎりでは孤例といえる。なお「○」は散文部を意味し、「●」は和歌本文を表す。

① 若紫巻・二八丁ウ（「ゆふまくれ」・「まことにや」歌）

○○○○○○○○○○●●●
●●●●●●●●●●●●●
●●●●●○○○○○○○○○
●●●●●●●●●●●●●
●●●●●●●●●●●●●
●●●　○○○○○○○○○○

② 若紫巻・四九丁オ（「てにつみて」歌）

○○○○○○○○○○●●●
●●●●●●●●●●●●●
●●●●●○○○○○○○○○

○○○○○○○○○○○○○○○
（こばやし・ただまさ／本学博士後期課程・日本学術振興会特別研究員）

【表一】『源氏物語』鎌倉期書写本における埋没書式と《別行×行頭》書式一覧

伝本名	帖／巻	和歌総数	歌番号	初句	所在	書式	所蔵先	備考
国冬本	明石巻	三〇首	九首目	いふせくも	二七丁ウ	〈別行×行頭〉書式	天理図書館	
	絵合巻	九首	四首目	うきめみし	一一丁オ～ウ	埋没書式		
			七首目	みるめこそ	一六丁オ	埋没書式		
	橋姫巻	一三首	五首目	世をいとふ	一四丁ウ	〈別行×行頭〉書式		
	総角巻	三一首	三〇首目	きしかたを	一二九丁ウ	〈別行×行頭〉書式		
伝為氏筆本	朝顔巻	一三首	一首目	人しれす	三七丁ウ	埋没書式		第四節掲出例。
池田本	真木柱巻	一二一首	一四首目	かはかりは	四四丁オ	〈別行×行頭〉書式カ		第四節掲出例。
伝釈西行筆本	竹河巻	二四首	二首目	よそにみて	八丁オ	埋没書式	静嘉堂文庫	
蓬左文庫本	総角巻	三一首	一六首目	いつそやも	六四丁ウ	埋没書式	蓬左文庫	
保坂本	真木柱巻	一二一首	一六首目	なかめする	四四丁ウ	埋没書式	東京国立博物館	
	藤裏葉巻	一〇首	八首目	とかむなよ	四四丁ウ	〈別行×行頭〉書式		
穂久邇文庫本	椎本巻	二一首	一五首目	雪深き	五七丁ウ	〈別行×行頭〉書式	穂久邇文庫	
御物本	桐壺巻	九首	八首目	いときなき	四三丁ウ	埋没書式	東山御文庫	第四節掲出例。
	賢木巻	二三首	二九首目	おほかたの	四一丁オ	埋没書式		
	絵合巻	九首	四首目	うきめみし	一三丁オ	埋没書式		
			九首目	しめのうちは	二一丁オ	埋没書式		第四節掲出例。
	松風巻	一六首	一四首目	めくりきて	二九丁ウ	〈別行×行頭〉書式		
	常夏巻	四首	一首目	なてしこの	一一丁ウ	埋没書式		
	若菜上巻	二四首	一一首目	とし月を	六四丁ウ	埋没書式		第四節掲出例。
	夕霧巻	二六首	六首目	わけゆかん	一六丁オ	埋没書式		
			一〇首目	ゆふまくれ	二八丁ウ	埋没書式		
歴博本	若紫巻	二五首	一一首目	まことにや	二八丁ウ	特殊書式【附記Ⅱ】参照	国立歴史民俗博物館	第二行目行頭ヲ一字下ゲル。 第一行目行頭ヲ一字下ゲ、下句直後ニ一字分ノ空白ヲ置ク。
			一九首目	てにつみて	四九丁オ			第三行目ヲ一字下ゲル。